

ヒネモス寿子

雪泥鴻爪、六辺花の節

雪解けのような思い出

東京に雪が降るのは三十年ぶりだと朝起き出したとき先輩女中のお房さんが言いました。私はそのとき十三になったばかりで、当然雪を見たのは生まれて初めてのこと。冬、私が起きる時間はいつも真っ暗なのですが、お屋敷のお庭が真っ白な雪で埋め尽くされてぼんやりと明るい光景は子供の私にとってとても壮観で不思議でした。

「トヨ、おめえ雪を見るのは初めてかい」

「うん、こんなの初めて見たよ」

「俺がガキの頃なんかは雪が嬉しくて嬉しくてたまなくてなあ、一日中青っ洩垂らしながらそこら中走り回ってたモンだけだよ、お前って奴は雪を見たってちっとも笑わねえし本当に子供らしくねえ」

庭師の熊治さんが必死に雪かきをしている私にそう言いました。そうは言われても、こっちは雪かきが終わるまで朝ごはんは無しだと言われているのだから遊んでいる余裕も暇もないのです。必死にシャベルで雪を掻き出していると勢い余って足を滑らせ転んでしまいました。

「おーい、そんなんじゃあいつまでたっても終わんねえよ」

なんだよ意地悪。暇ならこっちも手伝ってくれよ！寒いせいか今日はどうでもいい事ですぐ苛々してしまいます。それにしても雪が降る時はこんなに寒いなんて子供の私は知りませんでした。はあ、と息を吐いてかじかむ手を温めます。それでも私の穴のあいた手袋では全然温かくなりません。ふと空を見上げるとまだまだ雪が降っていました。空は暗いけれど、どこかぼんやりと白く明るく感じました。それにしても、とても静か。しん、という音が聞こえてしまいそうほどこの屋敷の広い庭の一角は静まり返っていました。

「なんでえ、空なんか見てぼうとして」

「…お母ちゃんにもこの雪、見せてあげたかったな」

「そういやのおめえのおっかが死んじまったのも去年の今頃だったかい」

「うん、そう」

「俺もガキのときにおっかが死んじまったからな、わかるなあ。ウン、わかる。寂しいよなあ」

今では年のせいかあまり覚えていない事の方が多いのですが、人とは不思議なもので嫌だった事に関してははっきりと覚えているものです。この熊治さんはいわゆる調子のいい中年親父でいつも田舎臭い赤らんだ大きな顔に無精髭を生やし体型も大柄でずんぐりとしていた方でした。声が大きく言動も下品な人で、やたら私にも馴れ馴れしいので正直あの頃の私は熊治さんが嫌いだった事だけは覚えています。だから私は早く雪かきを終えたくて仕方が無かったのですが、私の力では一向に進まないのです。

「別に寂しくないもん」

「ほんとおめえって奴は可愛くねえな、ひとつ上の千津の方がずっと色気もあるし可愛げがあるぞ。体ツキもガキなんだからせめて子供らしくしろよ」

千津ちゃんは私のひとつ上のお姉さんで、私と同じく母親が流行病で死んでしまった境遇であったけれど、器量もよく仕事も早くて甘え上手なのでみんなから可愛がられていました。そもそも私と比べる事態間違っているのだ。私は熊治さんのその言葉にとても苛々してシャベルを地面に叩き付けようとしてしました。その時、お屋敷の正面玄関の方で叫び声がしたのです。それとともに何やら向こうが騒がしいことに気づきました。熊治さんもうやらただ事ではない事に気づいたらしく、そして息をする間もなく一発の銃声、その後二発、三発と続きました。それは私が初めてはっきりと聞いた銃声でした。熊治さんは血相を変えて自分の黒いボロボロの襟巻きを私の頭に巻き付けました。私はそれが息苦しく、汗と煙草の匂い入り交じった雑巾のような匂いのする襟巻きが嫌で地団駄を踏んだけれど成人男性の熊治さんには到底勝てず強い力で頭を押さえつけられてしまいます。

「トヨ、今すぐ賄にいつて匿ってもらえ」

「なんで？これくさい、嫌だ」

「いいからいけ！」

賄とは所謂お台所の事で、いつもならばこの時間は煮炊きの真最中でとても忙しく、私など邪魔だと追い出されるに決まっているのにどうして熊治さんがそんなことを言うのかこのとき私はわかっていませんでした。

「聞いだろう、あの音。ありゃあ旦那様が持っているような猟銃の音じゃねえ、兵隊や巡査に持たされる機関銃みてえな音だった。もし強盗だったらどうする？俺たちみてえなのはすぐ殺されちゃうぞ」

いま考えれば、熊治さんという人はとてもいい人だったのかもしれない。あの時も私を助ける為に脅かしたただけだったのかもしれないけれど、熊治さんのその時の顔と言ったら言葉では言い表せないほど恐ろしかった事を覚えています。熊治さんに背中を叩かれて賄の方に夢中で走り出しました。正直恐くて目にはうっすら涙が浮かんで鼻水を垂らしながら走っていました。それすらも凍りそうほどこの日の東京はひどく寒かったのです。

賄は正面玄関から一番遠い所にあり、そして使用人用の裏口玄関が一番近い場所にあったので確かに安全だと考えるのが普通でしょう。そっと戸口を開けると賄は鰹節や醤油、温かいみそ汁の味噌の匂いや焼けたパン、はたまたオムレツの濃厚なバターの匂いが入り交じってあのお台所独特の匂いに包まれていました。温かい。私は思わず安心して気が緩みました。

「トヨ、おい、トヨか？」

「あっ、タデさん」
「よかったなあ無事で、お前どこにいたんだ」
「中庭で雪かきをしていたの」

タデさんと呼んでいたその人は何人かいる料理人の中で一番年上の人で、仕事をしているときはとても厳しいけれど屋敷の年端のいかない使用人の子供にはいつも優しい初老の方でした。自分には子供がおらず、だから屋敷の子供たちを自分の子供のように接してくれていたのだと後から聞きました。その時の賄はいつもより人気が多く誰も私が入ってきた事に気がつきませんでした。今考えると、あれは賄に逃げ込んできた人が集まっていたのかもしれませんが。

「こんなに顔真っ赤にして、寒かっただろう」
「熊治さんが賄に匿ってもらえて」
「そうか、そりゃ熊ちゃんに感謝しなきゃなんねえな」
「ねえ、何があったの？」

タデさんは私の頭の雪を払うと、声を潜めました。その時、若い料理人や女中たちも声を潜めて話をしている事に気がつきました。

「俺もよくわからねえんだが、それを見ていた女中の話じゃどうやら青年将校どもが何人も来て、入り口を打ち破って屋敷に無理矢理に押し入ったらしい。何やら旦那さんに不満のある奴らが集まって決起したって話だ」
「そんな、旦那様どうなっちゃうの」
「使用人は全員こんな風に部屋に押し込められちゃったからな、この部屋の外にもさっきから若い将校が見張り二人立っている。下手したら旦那さん、もしかしたら奥さんまでも殺されるかもしれない」

私はその時はじめて何が起きているのかを知ったのです。いいえ、もしかしたら半分ほど理解していなかったのかもしれませんが。まだ夜の明けきらぬ早朝の六時にもならない時刻。このお屋敷の主である旦那様は名の知れた政治家で、軍隊を指揮すべき立場にある事は子供の私でも知っていました。ですから、クーデターという言葉を知らない私にとってその状況に不安と恐ろしさで声が出ませんでした。その時です、再びあの銃声が屋敷中に響き渡りました。女中たちが口々に黄色い悲鳴をあげると、ドアの外の将校たちが静かにしろ！ど怒声をあげました。

「蓼沼さん、豊美ちゃん」

混乱の中、私たち二人に子供を抱えた女中さんが近づいてきました。比較的若い女中さんの春恵さんと、今年で三歳になる娘の花子ちゃんでした。

「豊美ちゃん、無事だったんだね」
「うん、花ちゃん大丈夫？」
「大丈夫だよ、この子いつもぼうっとしてるからさ」

抱きかかえた花子ちゃんを床におろすと春恵さんはタデさんに耳打ちをしました。私は春恵さんの真似をして花子ちゃんを抱きかかえました。この頃はよく子守りを任されていたからこういう事に関しては得意だったのです。

「…ねえ蓼沼さん、この部屋にいる子供らだけでも別の場所に移さないかい？いつまでもこのままじゃ拉致があきませんよ」
「移すたって何処に？子供たちだけじゃ危険だろ」
「隣の納屋なんてどうでしょう？将校たちも幸い裏口には回ってきてない。それにさっきの銃声、聞いたろ？これじゃいつこっちにお鉢が回ってくるかわかんないよ」
話は聞こえなかったけれど、タデさんの怪訝な表情は私を不安にさせた。タデさんは少しの間腕を組んで考え、ちょっとだけ春恵さんと口喧嘩のような事をした後、私の方へやってきました。

「トヨ、お前、花子と二人で納屋に隠れてろ」
「どうして？」
「この部屋にももしかしたら将校どもが押し入って切るかもしれない。せめてこの部屋にいる子供のお前と花子だけでも、見つからない可能性の高い納屋に逃げて隠れているんだ」

納屋とは賄の数メートルほど隣にある野菜や藁などが置いてある小屋の事です。私は嫌でした。大人とはなれて子供だけで逃げるなどとても恐ろしいと思いました。しかし、タデさんのその真剣な顔を見て言う事を聞かなければいけないと確信し、不安や恐怖をぐっところえて花子ちゃんを抱きかかえました。

「わかった」「頼んだぞ」「うん」

私は熊治さんの襟巻きを頭に巻いて外を見ました。外はまた雪が降り積もり、足跡も消えかかっていたいました。人影もなくまるで屋敷で起こっている事が嘘のようでした。

「いいかい、足跡がつかないように雪の無い屋根の下をたどって、自分が入れる隙間だけ戸を開けて、音が出ないように閉めるんだよ。…今だ、走って！」

春恵さんが私の背中を押しました。たった数メートルの距離がとても遠く感じます。花子ちゃんを抱える手が震えてうまく戸が開きません。カタカタと音を立てて戸をなんとか開けて隙目から体を滑り込ませました。なんとか納屋に入る事に成功したのです。私は緊張の糸が切れてその場に座り込みました。納屋は藁と薪が堆く積み上げられていました。天井には玉葱と大根がたくさん干してあります。私たちが座れる隙間は入り口のそこだけのようでした。花子ちゃんは状況を理解していないようで、私にしがみついて離れません。

「花ちゃん、どうしたの？もしかして眠い？」
「うん、うん」
「そっか、どうしよう」
「うた、うたうたって」

私は困りました。歌などほとんど歌ったことがなく、知らなかったからです。私はなんとか思い出そうと考えを巡らせました。そして、生前よく母が鼻歌で歌っていた曲を思い出しました。目を瞑って嘔み締めるように母のあのメロディを口ずさみました。歌を歌う事なんて滅多にありませんから、私は小さい声で自分の不安を打ち消すように母の歌を歌いました。優しい母の声が、私を包み込みました。

気がつくと、納屋の戸から差し込む光がとても明るくなっていました。どうやら花子ちゃんを抱きかかえたまま私は寝てしまっていたようでした。花子ちゃんも私の半纏の中で眠っていました。お屋敷はどうなったのだろう。もしかしたらまだ将校たちは屋敷内にいるのだろうか。タデさんや春恵さんが迎えにくるまでここを動いてはいけない。そう思い花子ちゃんを抱え直したその時、ガラリと勢いよく戸が開けられました。逆光が眩しく、一瞬何が起きたのかわからなくて心臓が口から飛び出してしまいそうでした。

そこに立っていたのは男性でした。熊治さん？タデさん？いいえ違います。そこに立っていたのはフードのついた外套を着た軍服の、屈強そうな体軀をした若い男性でした。そう、目の前で青年将校らしき男が戸を開けたのです。逆光で顔は見えなかったのですが、思わず、殺される！と思ったのでしょうか。私は無我夢中でそこら辺にあった藁をむしり取って投げつけたり、薪を蹴ったり、小石を投げたりしました。男は全く動じません。少しずつこちらに近づいてきます。その時、思わず投げた熊治さんの襟巻きが男の顔面に直撃しました。

「臭っ」

男が初めて声を上げました。私は驚いて喉が強ばり声にならない悲鳴をあげました。怖くて立ち上がる事が出来ません。花子ちゃんを更にしっかり抱きかかえて、後ずさりします。目が慣れてきて男の顔がちゃんと見え始めました。彫りの深い顔をした、青白い面長の男は怪訝そうに熊治さんの襟巻きを、汚いものでも扱うかのように持って「なんだこのデカイ雑巾は」とつぶやきました。

「……え、襟巻き…」
「は？」
「それ、襟巻き…」

自分でも思わずなにを言っているのか訳が分かりません。襟巻きの事など今はどうでも良い筈なのです。しかしそれとは裏腹に男は私の言った事を理解したらしく腰を抜かして座り込んでいる私に膝を曲げてそっとそれを差し出しました。私は黙って雑巾と勘違いされたそれを受け取りました。

「ここの女中の娘か」
「…はい」
「その子は妹か？」
「…いいえ」
「そうか」

男は全く笑もせず真面目な顔で私にそんな事を聞きました。
「ここは寒かったらろう、いつからここに？」
「……寝ていたので、…わかりません」
「こんな所で寝ていたら風邪を引く、もう屋敷に戻れ」

私は真面目な顔でそんなことを言う男の言動の意味が分からず、ぼかんとしていると男も私の反応の意味する所がわからないらしくいくつかの間があった後、男は私の目の前に膝をついて脱帽したのです。

「寒い思いをさせて悪かった。もう我々はこの屋敷を出る。だからもう屋敷に戻って大丈夫だ」

私は驚きました。旦那様然り、兵隊さんとは常に威張り腐っている人ばかりだと思っていたのです。私のような女中に脱帽をする人に出会ったのは初めてでした。男は私の目を見てそう言うと立ち上がって納屋から出て行きました。納屋の戸から見えた外は、夜がもうすっかり明けて朝の日差しで雪がまぶしいほど白く輝いていました。

それが私の中にあるその日の最後の記憶です。後から聞いた話では旦那様は将校たちに襲われ瀕死の重傷を負いましたが、奥様が機転を利かせて一命を取り留めたそうです。「これ以上は意味がないでしょう、この老体ではもう後がありません」と倒れた旦那様を抱え将校たちに気丈に訴えかけ、納得した彼らは敬礼しそのまま屋敷を出て行ったそうです。もう半世紀以上も昔の話です。あのときは私もこのように長生きするとは思っていませんでした。余談になりますが、私の前で大見得を切った熊治さんはそのまま屋敷を逃げ出しカフェーに入り浸っている所を親方に連れ戻されたと聞いています。全く馬鹿な人です。あの将校がどうなったのかは私もわかりません。無論、今では遠い昔の、夢だったような気さえします。しかし今でも女中の頃のように朝早く目が覚めます。毎年雪の降る季節になる度にあの日の事を思い出しては懐かしく胸がハラハラするものです。長くなってしまいましたが、これにて思い出話は終えたいと思います。あの雑巾とまで言われてしまった襟巻きはどうなったかって？それはまたの別の機会にお話ししましょう。それではまたいつかお会い致しましょうね。

